忠孝潮
3112
1

へ13
3112
1

へ13
3112
1-5

談洲樓焉馬著

葛飾北齋画

忠孝潮来府志

全部五巻

衆星閣梓板
桂林堂

自叙

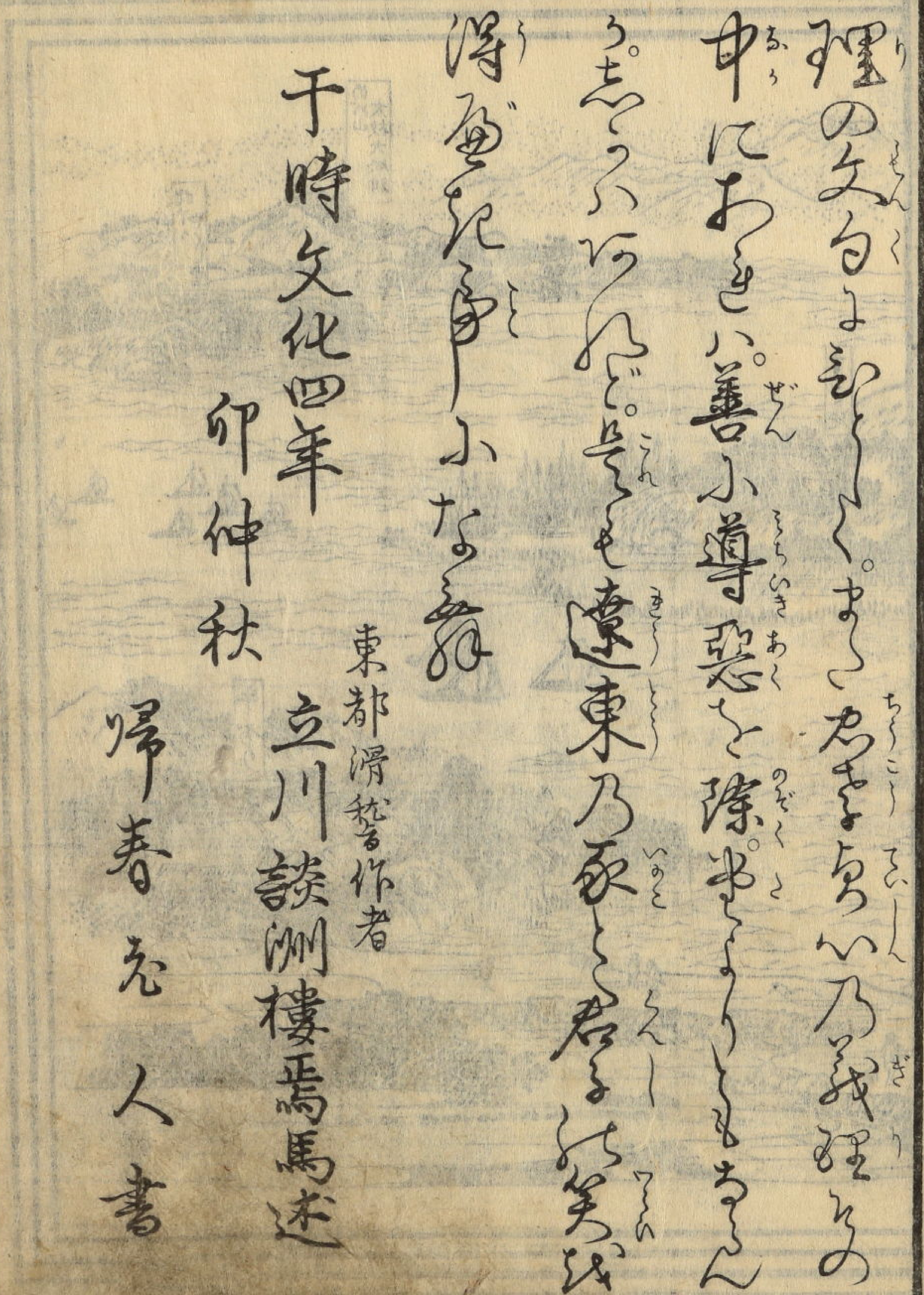
吹風小木の枝をゝ形ゝ。ゝ。ゝ久しく聲ぞきこゆれば。太平の御代をこゝ
わ業ゝ歌ゝ歌ゝ。今や世時ふ
生て。風ゝ彩ゝ楽む中。寅ゝ
恵ならゝ。宗性年の代ゝ。家業のいとま
小戯作ゝ。浄瑠璃ハ阿國我場。白

浅草御蔵前大塩屋
高二丁目

石嶄。そこ俳優乃作。風流の小冊まいられて。拙き筆ち文も。世をとゝのゝ事年久し。一日畫肆桂林堂。寢星閣の両る吾ら茅屋に訪ひ来て。例乃小説を編て賜ハゞと乞ふ。先小待山話ゝ抔と若ハ世ゝ里。雅談仇討乃綴ハ高名乃他世小流行する事。ゝし。ゝ

充ゞ彩ぢをぶつゝ打ゝ。ひといろ。くゝ需よ仕せ。ゆく燈ち。ゝ紀も。ゝ。藤家乃小女の孫ゝ。ぶゝこぼし。といふ小風とゆく風ら。ひ出ゝ。ち。ハ一と世常徳よ逝歴。彼津小船をきの世乃ゝ。紀永也乃出ゝ。つの婦。ゆ。耳よ。ゝ。ゝれを根無草ち稔ゝ。故人津ハ仇果

ら。俄佐乃正本にならひしなり。信田の小太郎乃世界。浮嶋。千原。薩島が名を仮。四方にしられる小諷が十五條乃目録と准へ。忠孝潮来府志と題し。狂言綺語のたはぶれに禿筆を弄ばせけれバ。またやよひの巻とはなりぬ。もとより小説にして文をかざらず。唯童蒙が閲やすからんことを趣ひ。世話を用ひて。浄瑠

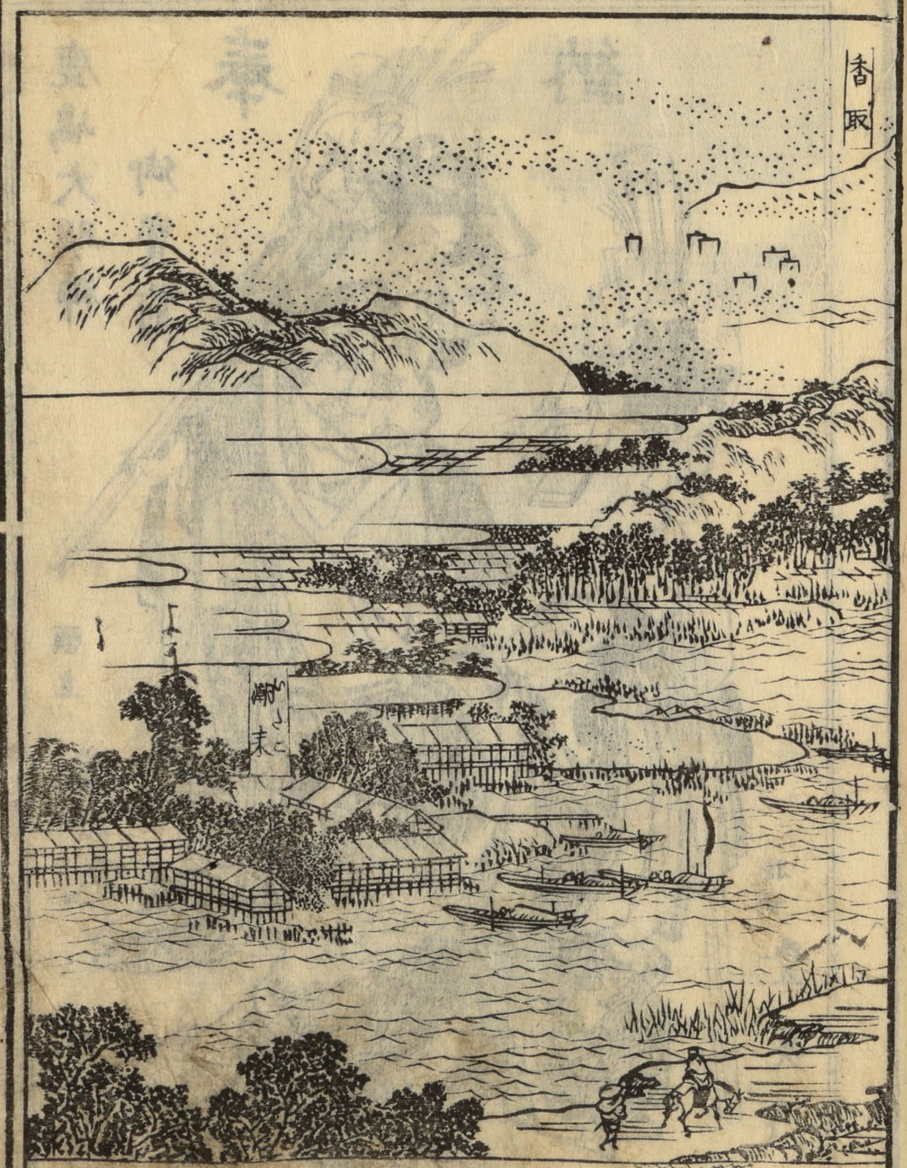


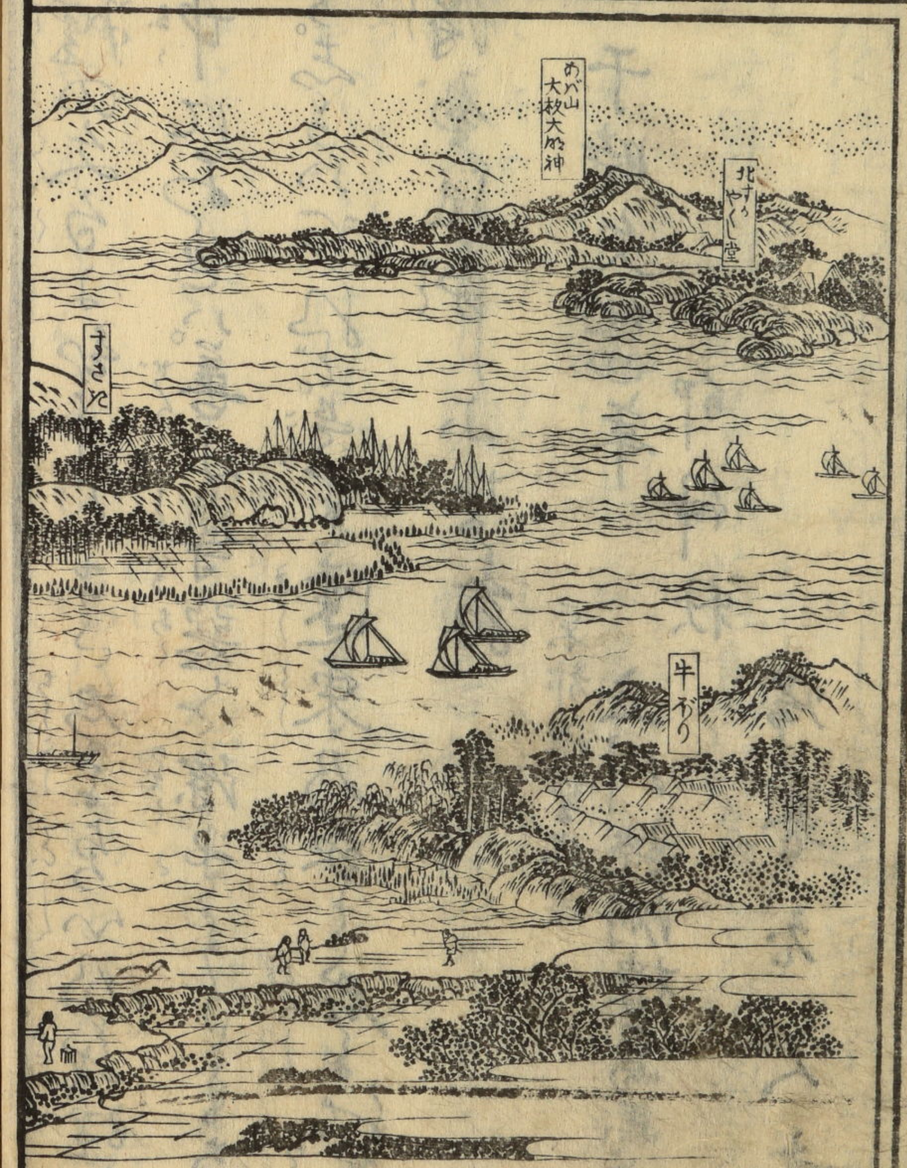
璃の文句よろしく。まことに忠孝仁義理の中にあるときハ。善に導き悪を除く。此ころばせもあるらんか。志ざしハいやしけれども。是も遠東乃家に君子が笑を得るの図事小なる哉

于時文化四年
卯仲秋

東都滑稽作者
立川談洲楼焉馬述

帰春亮人書


香取
潮さい末


めが山
大枝大明神
北すろ
やぐ壹
すさ沈
牛ぐり

願主
千原左門

奉納
鹿嶋大明神
御寶前
願主
信田氏
娘女
登美川

頼之

神壽丑内

香取洋ノ宮

常州湖水
蓮葉ゑらら
すま代

頼主

総良佐倉町
柳亟勘義

願主　真壁鉄平

願主
茂治兵衛娘
志ゆ

大願成就
文亀元年辛酉月日
願主
浮嶋大八郎英時
敬白

巻之一 壹
立ちわかるらば利根川の舟
流るもとゝ見えゝ

同巻 貳
恋れば話ぬと舟のうゑ泣れ
嵐とも横みわ猫あゝや

巻之二 壹
柳ゝ虫なれやわだ
山やる風みもなぐかんせ

同巻 貳
君そこ夜の二日月さゆゝ
雪にちゝとえさぐうと

同巻 參
ゝがちゝ舟が出みをあゝば
わつて見せやらの胸ぬ

巻之三 壹
碁盤なふあてもあ場が
ひゝい碁鼈ぐ目が多ひ

同巻 貳
こゆよ康嶌ふ神あれならば
ありせまゝやいまいら度

同巻 參
待がほふいう別とぐういの
ありみとうれがかゝらアゝよう

巻之四 壹
いとこで出ぐほれ十二のたし紙
行つとぶりつ思案をし

同巻 貳
意ふちぐれてなく蟬よりも
帰ねほゝ義が分紙とがぐ

同卷 叁

楫をよくぜれ紙頭衆
ちりそ神さび森のした

同卷 四

いつ〜やおもひは羽織の紐よ晒ふ
おもひをむそびさげ

卷之五 壹

ひとこと出おもはれほとものの中り
あやめ咲やはほいはちくね

同卷 貳

ちちく〜啼のそ敷やはぐみ
かんぼちてもいやならね

同卷 叁

月出度〜がこっかさわるとぶ
庭う落葉御代の玄

忠孝潮來府志 卷之壹

東都 談洲樓 焉馬著

諷

立引なくば利根川のながれ流もとめて見ちよ。

人皇百五代後柏原院の御字。時の武將八足利十代源の義澄公明應の末文亀のはじめ比ほや有けん。常陸ハ國信太。真壁。筑波。三郡の領主ときこえし。信田の小太郎將春といふ者あり。父信田の左衛門將義死去ハ後家臣薩嶋兵藤太。浮嶋大八郎。矢原左門。三人男足のごとく補佐ときれる。十有餘年。ちれば成長するに隨ひ。弓馬の道ハ達し。文歌ふこゝろを寄。その氣質の禀威あつく猛かゝ次。殊ハ容貌美はしく坂東一の優雄と人こゝる稱しけり。爰に薩嶋兵藤太。そ老臣ハ出頭といふなるら佞肝邪智のこゝろのあて。何ぞ主君小太郎ハらしなひ。家國

が棄てんとすれども浮嶋ヶ千原の両人忠臣世二の侍なれば。淫方なく折ふし伺ひ入れ。扨も小太郎将春は管領山内顕定の招ふるに。在鎌倉の内新参の侍ふ。筑良雲八といふ者あり。彼りのは房州里見の家臣なりしが。軍用の金子を盗みしことあらはれ。彼家を出奔し薩嶋を頼み。浪人の身は落ぶれかくもなりたれば。吹挙して小太郎の近習ふ召仕せ。我腹心の者と已。肝曲の謀計を云ひ合せ。元来雲八切言令色巧ミ追従面としければ。小太郎も側ふ放さず。何事も雲八が言葉にまかせ。あ府唐士が原ふて若殿ふ集會して。的矢あり。射たそ。ゲれふ及び何是も別まて帰れ。雲八小太郎が袖を引いていふ。ゲれふ及び大後の里へ行迎ひ。今宵を旅館の欝氣を晴したまへと。竊ふ云ひ。ふぞ。岩木ふ向ふ若氣れ小太郎。ものびく大後の三浦屋が楼上ふ登

り。餘多の遊君の中に登美川といつれば。其北海道一と名の世(あり)もむべなるかな。雲のびんづら霞の眉。花のかほばせ雪の肌。繪ふかくとも筆に及ぶべしいふへの虎渓前粧坂の少将も。これおどふはよもあじとぞ。どうや。小太郎も乙魂空にあんぐ。えとれ顔の艶なるに。又登美川も乙みぐれて盃の数もかさねれば。雲八を呼ひ中居ふ呼ひ。紅国に伴ふ入れければ。登美川もともなひ。かれ綾一流の舞。やごとなき清かさふ達ヤことれ姉さよといふに。小太郎も我とて。東路の道れてなれ常陸帯。うちとけくゆかんとて互に警れ。ぬり洗かくれ。むつ地言れ数そ七ッの清ふ又の夜ふ紛して帰アれ。寔や一度顧ふ人の城ふ傾け再度かつりこれば人の國ふ傾れとは此る。小太郎。そ夜のうけり香もこの夜の月ふ残れば。ばかりにて。約束ふれ日ふまちるぶ。ものびく通ふ玉ものの

忠孝朝鍬武士鑑之一

夜のかねごとに暁の雞ならふみ。鴨川も起て別る床の上に。よはる枕
も暮や待らんとの思ひあれど。ひきとむる袖のきぬぐに。こゝろ弱も居続け
の酒とはなりけらし。昼て夜に増日に長じたるひのたいなけれべ。近習の
侍に佐原加藤治といふ者。千原左門が旅宿へ来り。竊に言をれる扨も
主人にハ此程大磯の遊里へかよひあひ。夜初の御戯と存ぞれとこ猶日く
夜しれるなども故に。諫言すといへども中く御ききいれなきに。深夜もいとひ給ず御
供としての御一友人万一途中において狼藉もあらん未なし。所詮それがしことは
者なる御けしきをみあれはじ。貴殿御賢慮めぐらしたまへとて。いふ千原太ふ
驚きよくも申されたり。おのれ新参の筑良雲八らの者はそゝめにこそあらん
某もともに申上んと。夫より旅館にいそぎ小太郎のゆゆが待居る所にかくと
はなけれど少部の酒にまだ醒ずらで駕にゆられてゆられしが。左門が来りし

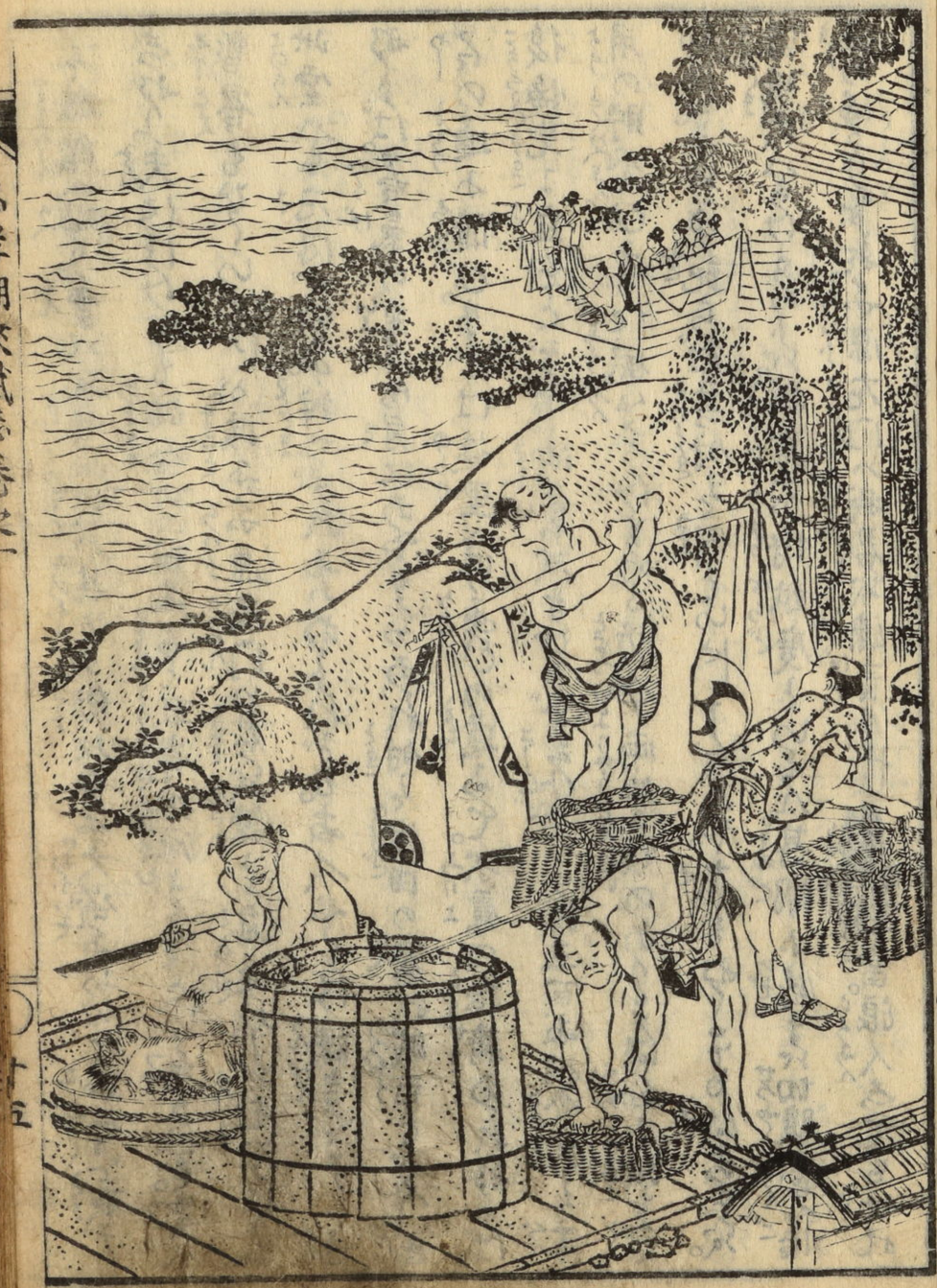
体なくく言てもえるもあられべ。予此程不快にありし所今朝より鶴が岡へ
参詣し。それより江の嶋辨才天藤澤寺ほど廻りし故。駕に酔じとおぼえ
たり。暫休まんとて奥へいらんとしまふ袂を扣へ。申上る儀あり御待下され
よしと。双眼に涙をうかめ。御幼年の時よりして御成長の年月を待。補佐い
たせと拙者に何とて偽りを仰ひ。との君大磯の遊里に通ひ玉ふを。我社
知りつ。適忠臣ありて是を諫むれど遠ざけられ。筋なき新参の者を寵
したまふハ何るゆゑや。夫人君臣下として左右の手足のごとく。いつくしみある
時こそ安全なり。今のごとく成し給ふ時ハ臣又君をみる事仇敵のごとくと
といへり。淫酒に益夜を忘れ遊里に通ひ玉ふ時ハ殆危うし。今物静なりと
いへども。山内扇が谷の両家確執へまのあたり。小田原に北條あり。遊所
の道におぼれて命を落しまふならば。御先祖への不孝末代までの恥辱

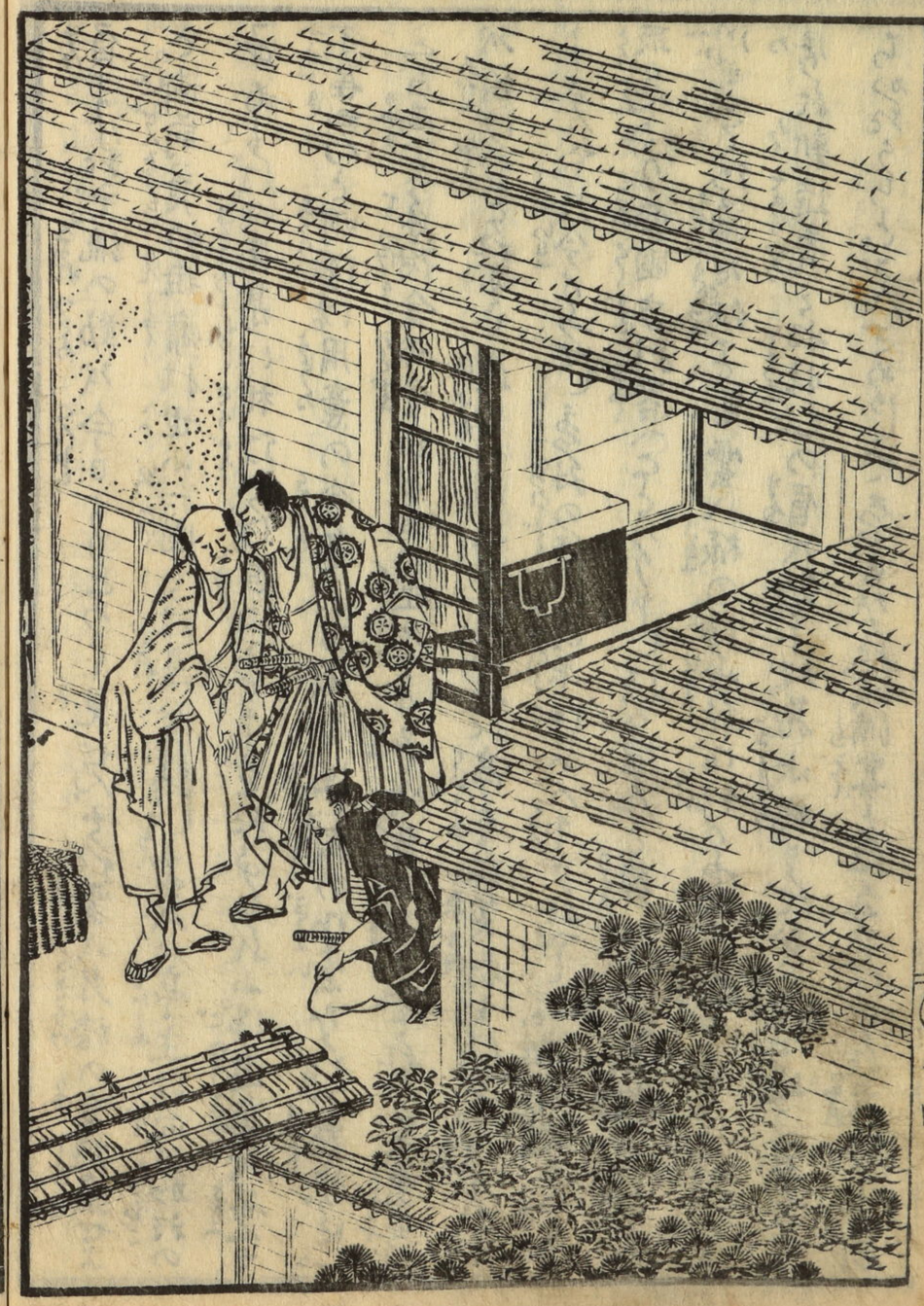
此うへやあらぐ。早く佞人どもの首を切り君の礼行とぶやうに。御賢慮と
わぐらされ色しと。憚所なくやけ立ば。滅ぶ良菜に不苦しと詞のごとく。日比
ふ似合ね小太郎顔色かつりく腹立推参なれ一言已にそれ不ふるぞなや
誰か有引立よとありけれ付雲八走り出。主人の仰そとたれよとらけ立
ば。五原眼付いうじ。佞賊の匹夫目ふ拍見せんと刀の柄にをとかけるを
仕彼のりんとぶ出れうち。雲八を甚座を逃去ね。ちうれども五ふ八御
前に乗へぎれ不れとて。頓く國ふ帰て。薩嶋兵藤太が計ふく。浪人の
身と成妻子に連て立退けり。呉子晉八軍門ふ眼付懸。呉王の恥辱に
笑ひしとかや。忠臣國に出れば悪人進む習。ゆゑび諫付いれ者ふれば。
誰ちぐからび遊里れ樂と君に心ふとうに人ふと泳し。小餘綾の戯ふ
慢幕にらうせ。登美川と誘ひ妓女に集り。遠近の山く海原ふ行とる

海士の小松群いるふるも面白しと泳くし。れ樂みふ日を送りけり或
る浦屋れ亭主雲八ふ向ひいるやどかれ伊方登呉川に出寵愛の
殿をありがくく存れなれと。斯日毎の揚詰ふて。対ふ訓深の客くて出
ずぞ。年月もたら其内ふ伊左勤相をみ伊帰國あれくれへ。故日れ仕
新造秀の仕着れ高ぎ。そと付伊勤兵めつく対の客ふも出し。未
ぬぐふ樂くあれが粋ふ客。とれハ内淵以来ハ出に付遠く御通ひあれが
双方れ仕合と。憚ふがくふ存れるりとらけ出ば。雲八笑つて。夫を町人百性の
客ふいるの。此方の了簡とハ相違ふり。其方直ふ殿へ申候と何う唱く
ふぞ亭主ふ付打く恨び。滅ふ妙く奇くれ伊言葉と夫より小太郎が
前へ出。そと伊遊奥の邪魔とハ存ずるぐらい上れべくね候。去年西國がく
より奥州へ通りの貴客。との登呉川ふ一見の盃ごとありて。又帰ふの

序。今日當所の旅館より十とせ余り前に金子五百疋あまり出でて宮川を渡り清し。直ふ連られべたるの相談。但訓染なしおれ。一見の客へ出るとて本意なくねどいまだ五年を経ハ身代ふなくね宮川。そのうちハ流の世ハ先出世いとそ。甚身の任合拙者も満足長ひ内ふそ口舌も生ずおもうにいとふくねるの好り。おもひ方ハ跡先の考ふ〳〵登り清ふ所が下り坂ふハ愛相ばし皆金銀のいとと事と。よ前勝ふと并ひ芝氣よ南北理の當前。用ほどけ〳〵に登美川が拙おりひ。小太郎ハ数日の酒狂燈火ふ油の口上ハ。用よりも日比の短冬十倍して。其方ぶりとふ行ぞ宮宵川を流れ身ふくれ客ふ仇とべを我揚結のこのみあ忘未ハとべ恋じとそふ故西國方の客ふ根引の相談としふや祝會の客に清出されし時此座ハかつぐれぞれう田舎なれと思ひ。謾くいふも。客の立引あ

負まじぞ。流の勤ハ今日よりとめく見せ。それ雲八身清の金持ふせよと。御前三月の痕癪れ世ふ一國とは是なれど。雲八ハ亭主に向ひ。かれの子あふば。一先基に相談とげ。其上ふてやるそれるれふ。伊遊奥ハ芸人も不屈ふと呵ほけ。用意の今子三百疋。殿の出なれハ黙止ぐし。三百両を多附金ハ金百疋の国えより著次第相渡さん。それまでハ宮宵川ハ預け金これ有く違背ハあれはじと。いふに亭主は笑顔をたり。何ふいふとさん。只今ふ世ふ為ハ身の辰ハ去年ふ平伏めんぐべしと。泥文認め今清取是より西國方れ客へとり中したふんと競ひ。ふ行れが宮みれもこ落合。伝ぶも雲八様の伊世話ふれりふも余ふ有りこいふ小亜居れ新造秀こ和怪びの冒ハ。ふ水楊生でお二人と送りのふとも。ちかとうちとざんざめしてあるもなれ。又酒宴とはありにけれ夫より小太郎





を旅館へ送り。雲八に呼出甚方が働に成る。大儀ふ成て取辱を取ざり
き形り。夫にはけても跡金の二百あ。ふ〳〵取寄相減ようにとし〳〵ありれぞ。雲八
暫答もなく〳〵いとしが。誠ふ多原左門い君に諫〳〵身退たしい充かるなり。
此雲八も左ほどの。辛へぶれあめ〳〵ねども。あ人き〳〵ふ諫言とやとは
形〳〵ば。元氣の至り出身にあやまちあれ付そ。信田の家れ滅亡とぞん思
やり君の通ふ隨ひ。主とは遊里へ淫あしの道ふて。不慮の狼藉あれ形〳〵げ。
後悔先ふ立ぞとぞん。御きに成て。笑出し〳〵れ三百あれ今ふ〳〵軍
用の貯金ひそうに風ゆ〳〵ふまつる所。今両管領のめりとふ公ふ汲と含
むは。そふるの紀らば其付を何といとしゃ〳〵ん。左を形〳〵とも山あと成。
浮嶋大八らけまつふ。拙者不埒越度といえん。其期ふ係まば切腹と覚悟
被めはり〳〵れ。多原左門ハ我君に成諫言りせ[illegible]動當。浪人きても世れ

人ふ忠臣義士と誉られ〳〵ふ。我を佞人讒者よと悪ま成清て命をすて。
君の淫こと〳〵休やせしる陰の金。浦金の二百両ハ嶋も思案も門流の。
隠も尽て我命只此ろハ淫ご存ふと涙と流しる切の一言小太郎も感惑
の赤面ちてぞ居ふ。が迚も思案ふあるとぶと。既ふ自害とえくけとば。
雲八押止ふ何故と制を成ふぞ。ちれば〳〵ふ多原が諫言に引替て。ち方を
我〳〵ふ成察して。是ぞ〳〵公をはく〳〵せと。も早ふ限ふあるとぞ軍用金ぞ
見出し。越度ふ成ば腹切て。悪名清れもいとふはぞとは。頼母ふ成い
ぞや。跡金出まねば我も恥。夫ゆえの切腹とぞとめてもとふね不法の短氣。
いや〳〵それハ匹夫の了簡。多金もかんがえ淫。金子に所領ハ替れ
ぬ。か〳〵ば君ふ成上ハ。某君の為ふ義成清ん。其沢と申。御家れ重法。玄
宗皇帝れ重ふ。鸚鵡の掛物。此度管領職ふて。御覧あるべとの仰ゆ。

さし越ぶしとの御直書。拙者持参いたし。薩嶋どのゑ訳ゑ申なくば。頼りの役人ゑ原赤腐へ申。此方へはさらるとは必定それゑ質物ゑ入。跡合ゑ取ゑ調達さべし。此國あらばいろゝ申うけれゑ候もこゝ元の侍なり。此御子間いとゝ申ば。今ゑ始ぬ主方がえかゝひと大ゑゑ怪び。右の紙ゝ書中に認雲八ゑ渡しけるとゝ。やがて吉左右おもゝせをゝゝさんと。常陸の國へぞ急ぎ給ふ。皆薩嶋兵藤太ゑ工ゝ。雲八ゑ分左門を遠ざけ。小太郎ゑ退物ゑ人謀計とは申ふゝ。大磯へ通ひゑ活の為と泳め。放埒惰弱日ゝに起過をいたれば。いかゝへより。名将勇士も美女に身ゑ失ふゝ。和漢とも挙てかぞへがたし。慎むべきは色ゑりけり。

諷

恋のゑ活ゑ　ねづみゑひれ嵐ゑれ根ゑ猫ゑゝや。

國ゑ盗人家ゑ嵐あれの。譬ゑいふごとく。薩嶋兵藤太ゑ肝曲の謀計ゑかゝ

ゝ。小太郎将春ゑ書状ゑ仕ゑ申ば。雲八ゑ早速常陸の國へ下ゑ。薩嶋ゑ遠書状ゑ見せ次第細に物語りけるば。太ゑに怪び。大望成就近ゝにありと。太刀一振とり出し。是ゑゑゑ葉れ家ゑ傳ゑれ。二日月九れ名劔なり。過しゑ比ゑ葉の分亂直。主人信田の九衛門将義公だゝひゑ隣國の因れ為ゑ葉の家れ息女粧姫。信田の小太郎と言繋ゑゑ。明應のゑゑ。京都室町殿御前ゑおいて有ひれ。信田れ家の寶鸚鵡の一軸。千葉れ家の二日月九の宝剣と。双方頼の印どりかゝせやとゝ。ゑれ約束ゑ。ゑのゑゑ小太郎どのゑはいまゝ十戈。主君将義公ゑゑの年逝去時ゑゑゑれ我のゑみ。小太郎ゑ追失ゑんとゑふ所ゑ葉の亂直先達ゑ婚姻のいゑゝ。縁組すみてゑゑとゑゝ。二日月九へ奪ひゑゑ我ゑゑ。然ゑに薩嶋の一軸管領の仰ゑゑ。ゑゑゑ

契情牙清の令れかりに。失ひしとて家内追出したくんふ。浮嶋大八はかりあれば。我くゞ越度といふハ必定。この言訳あれべてやといふ。雲八氣ぢうひ仕まつる夫ふこそ手段あり。み一油を真壁の宝荒ふ竜あるよし。その預りはみ原嘉膳。右の書面なりつく。相渡しりあとようにとあべ定めく持ふいさぶし。其ふた推尾の山道ヨ行伏して。赤道具なりつく打殺しかの寶を奪ひとれ物るのふ。登美川牙清の跡今ハ渕ぜ。のび〻ふれ阿房の。笑情連てく落う。ほとい管領内偽り家れ宝を失ひ故自滅されハ心定されべまもわてこび家国内奪んる。業のうちといければ。薩嶋まを打て滅ふ妙計我こ腑合せり。信田の家内押領しあへよくば東国に旗内靡ぜ。今小田原ふ伊勢新九郎長氏入道早雲勢力ひ破竹のごくかれば是によりて管領内打亡し千葉。里見を裏に扱ふん。成就せぜ貴殿も一国の主ふ取立ん。夫までのたゝし。此三日月丸を預置とまに渡せば怪ふあべうりたり。ぞうり見廻し。扨ふ系右脇へ虫書をとゝくゆ。武蔵新三と兵合せしがいべあり。言葉れ下。氣ぢうひ有るとを用意をいしたりと。次の間より籠こ立出。扶子そめれあて美れ。又此方のまを若も浮目ふかんあ人ふれと呼声に。庭の切戸内押明て。加波山の拂々藏敦が峯れ狸の角治鉄炮打提土にまを内はと。兼て心頼こあり。故御左右内相待りあと所寂前の浮状ふ依て。早速よこふし。あり。ちしあべらに襞美を跡あて下ふ。お裏付かれども仮初ふぬ命がけの此仕事。浮勢兵あれべと。欲ふ目のなれ言葉の端。匹夫のこれ内。薩嶋が當坐のやうびとなげ出小判。とるまもくれ分別拾両二人ぐ分わの内不簡かどけなしと押

いづれ何時もれね通り筋先へ廻つて待ふさん。いそがれて安くと雲八も。それと知られぬ忍びの出立。我とそれより荒波峯ふま窟の内へ入もさん吉左右と〳〵告たせよ。氣ばたひあ〳〵ふ系嘉膳と入れかはば。有無ないつせどもたた一打。コリヤ人や笑椎の尾れ山ちとそ別をゆく。かれ謀計めりとちぶ。千原右膳管領職の仰と名れべいるみがく。まま壁の寶藏より取出。持參せんとおりひしが此事浮嶋大八方へ〳〵せ度。書狀を認め。家来淡平氏使として。返事ふ〳〵ば椎の尾れ邊よ待合とど。とやけり。甚兵へ家物ふて供人引連北を如月さへ入りて。荒波の峯に消殘れ雪より〳〵ふを命とはそひも者ふね山道の。ぎご朝霧ふ〳〵つる。顔を隠して十人どう。山刀抜はれく。先ふ立若黨の緒膝薙ぐ切倒さ。足をとく言甲斐なれ下部ひれば。皆手物を捨〳〵逃去りられ。戸を蹴放し

〳〵ふ原嘉膳刀抜間も一人を切〳〵落さ。此男ひふ為れ。右往左往よ散ぬを逃さじのと追ふれ。拘板ぶふと二ッ玉。血けむりぐらと立〳〵がてと跪ぶ。をひぶし忠義一圖の侍一朝の霜とそ消〳〵けれ。ちを〳〵たりと拂を荒波。淡炮をつぶげ木陰をとち出相圖の鹿笛吹ふ〳〵せバ狸の角治天狗の重と。ふ下の奴原ふを連て〳〵ふより北めまを。頓〳〵駕の中より。かけ絵の相を取出。拂を荒いふりう荒良雲八どの。紅朱みふ。此荒波山の峯なれ。ふふれ窟の辺ふ待ふの事。これを渡〳〵襄天の金と引替。汝等へも配ふを〳〵し。我と角治を峯を行。殺生禁断の山なれば。鐵砲ハ我家へ持行ちて居ふ天狗の重とこの死骸を片付て跡より取且一刻もく安く此宝を渡さんと。ふ人ハ峯へ登れば。ふ下ども。麓をとく分且ゆく。重ふハ嘉膳う死骸谷へとてんとすれ所へ。淡平ハ戻れ道。孤子ゆよう葬駄天でして。

夫と又たゝかい捆こ膝ゝひつ負。扨そゝや清うえ人みへれ最期みてあり
けれゝ。遅うし残念さよ。已何のゝ頼にぞ。苔蒸ふ白伏せよと髻つゝんて
岩ふ捞はけ。捻ぎらせば。眼鼻も血しほよ苦しゝ声みて甚頼こ人ハ信田
の家耳。その名を何とも存ぜ祢ど。頼まれは猟人の拂を藏狸の角治此
五人が沉ゝて寶のかけ扨と中ゝ式持ふゝそ。ほうびの金と引留ふ只いま
沉波の峯へのがしまゝり。我ホを此死骸庁ばけよと祢むぢうに褒美も
そゝねむぢ仕事。命ハおたそけ下されと。涙を流しいゝれふぞ。夫こそ皆何
も延されじと立上ゝは逃出を重こ。ひゝゝを拔より模なぢり首宙ふ
打落ー祢ぐゝに山道のあを巣ゝふゝ行足も忠義ふかゝゝ鉄平ゝ嶮
岨も何かゝ祢よ。走り附ゝ祢松玉巖地藏ゝ嶽の邊みて夜ハ明のぐ
と明渡る向ゝ人ゝぐ二人連れゝめゝねゝ怪やと。立寄てえんと追ゝ。

拂ゝ藏角治を疵ゝ足。あゝをはゝれゝ笹原ふかの一軸ゝ箱ゝ隠ゝ
休ふひて居ゝけれ。扨こそ癖者遁ゝと。鉄平を大音揚。ものれ盗賊宝
ゝ奪ひゝぐゝへ行尋常に渡ゝと呼ゝけゝば。此勢ひふ怖れゝ陳じ
てえんとおゝひて。我ゝは此近郷の者ゝ。富山へ宿願あゝゝ七日ゝ参ゝい
そゝゝ。たゝうの事ハ兄ゝとゝふ声も怪ー。何ゝ汝ゝのまゝ懐中ゝ
改めんとゝ。ゝ入引出ゝハ扨ゝの一通。ひゝゝて漬ゝゝ拂を荒ハかの一軸ゝ箱
と取逃出ゝたゝぶゝ抓んゝ引ゝゝ。引ゝに持ー密書れ一通。ゝゝれてゝ
一大事とおゝひゝん。狸の角治。ゝり返ゝえんとかい抓を鉄平ゝ早速のゝく弟ふ
吽とゝかりに眩暈半ゝゝ裂ゝふゝゝ。故十丈の谷底へゝ。ゝ
ふゝ落ゝけゝ。拂ゝ荒ゝゝん限と抓ー手ゝゝて放ゝ互ふ命ゝみゝ祢ゝ箱
ゝ中ゝと引合拍子。ゝゝゝ谷人取落ー。二人も慳ゝぼうぜんと。吐息ゝく

も山道を常に訓れ拂を蒙が廻り左へと欠出と成。氷の刃はおが み打。嚴ハ二つ
ゐ血を滝つ瀬谷の細道一ト筋ゐ忠義の奴ぞ健氣なれ。足ハさて置てゐ又
ゐ葉の介亂直の譜代の家臣に。尾瀧甚内といふ者あり。武藝を人に勝
れし侍なりしが。寵愛の妻死去の後。主君ゐ隨ひ。在鎌倉のうち。遊里ゐ通
ひ。若氣の至り。放埒ゐ身に持しく沢くにげれ事ありく。ゐ葉の家と立退き害
せんと思ひ結ーり。其比東國穗なくねば若主君は浮身の上に一大事あらば。
早速ゐかけつき。御馬先ゐて討死して。せめて浮恩を送ーさん為と思ひ定
て夫よりも。爰かしこに漂泊。時を待ち折柄。ゐ葉の家ゐ伺ひ。一日月九れ
太刀紛失とさしより。何卒これを尋出。故主へ帰参の種ゐもせんと諸國を
廻り尋ねども。させれる掛りもなければ常陸の國真壁といふ所ゐすまし
乳母の知縁ゐく。百性平作といふ者あり。爰に暫し滞留。平作が娘ゐ

為といしハ艶ーて。おうもゐやさしく。古河の御所ゐ稚き時よりはべ居りしを。
平作年老く農業もとゐ。ゐはう甘ゐば。呼ーとさけれを。いつしう甚内
とゐ枕の数かさねりて。いとゐ帯れ結ぶ縁ゐことと親も足をゆして夫婦
ぞ。しゐけれ。程なく男子出生して甚ゐ助と名ぶ。或時平作甚内ゐいふる
を。貴殿ハはじめれ武士の浪人なれば。我ゐにかまいぞ。出世ゐ願ゐ給ふ。我も
惣領に男子あり。幼少より角力ゐ好み。ゐ武藝をとゐ為ぶ。百性業
ゐ嫌ゐふ。ゐて已天晴ゐる侍ゐ立身するほどゐ。此家へ来れゐなれと。十八歳
の時追出せ。ゐが。渚所ゐ紛迴り。今ゐ信田の家れ倍臣となり。名ゐ鉄平と
いふ。滅ゐ蛙子を産く我ゐこそ。龍を産ゐれとゐひよ為ゐ門尾ハ落
て親に似ゐれ。蛙と成といふ諺のごとく。下賤匹夫の我種ゐ忠左こそ有
ぶしと存をれど。ゐ残念ゐ万なり。足ゐつけても娘ゐ車。お願ゐ

声くりて。涙を流して云ければ。むなしく仰ぎ見ぐら。鈦平どの器量のわと。
為が嘶わ兼れた。ゆゑて出世あるべと。力ばつけく女抱を。扨も娘おゐ祝ふ
孝公あつく。田畑農業にせい出しられば。甚内と奥列の辺まで。商人とうり
市町あれ所へゆれた。又関東筋さまぐに身をやし渡世の間ふ太刀の有永
五ヶ年のうち尋られども。夫とまがゝ子ぢ。とやもこ舟も四歳ふのくる。
今年八幡宮も強られが平仏が持病も公りと形く。在所住居しる。比一も
如月さへ薪をちふんと出りれが。山ハ班ふ雪あれい。夫婦連ぶち流波根乃。
木のかゞに立ぞよれ。春れ深山の谷。谷の細ゑ木枝を取るどてあどし
休ころ隙ふ。火打袋取出。打ほけく。落葉ふかさよせこれよりみせば春
風ふ暖氣ゆ場士の舞火やことて女房ハお為なり。独まりてあるうの
やとぢれるゆ。遥も女夫の中れ喜見城とやいとん。誰聞人もなられば。甚内

そおあるにしるゆう。今月のあるゝほり。焚火の徳とうふけけるも。
金唐皮の火打袋を先君ふ兼野みて御狩の折柄。某いまゞ十八歳の
時なりしが。さもすることはじれる員猪。餘多れせと弧かけちし。御前同ちく
一さんふ弛る而只一鍬ふ突止ゝと。御感のあまり。御腰ふ帯したまふ國光
の刀に添下され。火打袋その附の仰ふ此火打袋といふ拙。其昔日本
武尊東夷ゆ征ゝたまふ時。駿河の國ふ至りまふ。弟ふ國の事ども。尊を焼
殺ゝりふさんく謀て。此野ふ鹿多し狩せるゝと欺たヤせば。尊偽ゝまつせ
なまるで。野ふ生まふ所兼ゝなくみし夷ども。四方より拓野の草ふ火とかけ
て攻ゝるゝ既ふ危くゝなれ時。尊其姨の倭姫より賜ふ所の嚢ゆ。
ゝまふに火打の有ける故則火打とゝつく火を打出。剣ゆ拔く艸ゆ薙
拂ひ。ゝゝ剣の勢ひ嵐となつて。還て彼夷ども焼亡ふとかや。その古

實を今に至り武士を常にあなむぞれ物語心魂ふるひ有難
名戦場ふ赴くば名あれ敵の首とるべく。猶も高名せん物とあり。ひ
るれ天魔が入彩り大酒ふ好みて遊里にさはよひ終ふ衛家とうち退
我とつが身ふ愛相がほて。後悔先ふ立ざり。不忠れ罪う今此ぶ後刀ハ折て
斧の柄ふ結び付ふれ火打袋餘塞ふ凌く一衣も。今あらはれるとく
れ火徳。ぶ有がるた恵と。打ちはれるれあり様を毒も同理といふとも
只女氣の涙うも。嗚呼我ゐぐら不見のくり幸。くのゆのも恥と。乱ハ柴
とり集め。平化どの。病氣とい。甚く動も待つあくん。是ふ持てそあくそ
先へ我を跡より割木と梅へ脊負く行ぶとい。けばお為ハ有ふ柴ふ
負葉山ちげ山繋げ。ぶ。ひ入あハちぐろれ山道紙て帰てけるも春ぶ日も
已の刻ぶて。盆ぶでに仕舞て行人と森々たれ木立の中。谷間ハ余所の喜より
も。迷く咲なれ梅が香ふ木伝ふ枝ふ先だて。花にうゆ鶯の声とすべ
公なく鐘の花を散とも本意ふ。あくうん廻を松が枝ふ。さハそもひ
の箱のあれば。不思議ふ足をとり紐を解とく能ふれば。鶯と匣かけ物ふ
ハ記ぶど朱印あり。筆意彩色尋常ふ。何様古人の名重ふこそ。
有しも怪しやと巻納め箱ふ入ぶ懐中せんとすれ折ふ。最前鉄平ふ蹴落ぶ
理の角治氣を失ひて臥ふれが。谷の清水の口に入しが。衛ふとふ付。惣身ハ血ふ
痕をいさみ這廻りく足ふ見付。拭物中ふとふがみはくと。拂ひ退れぶ又取
はく。めんどうれとふ鉞ふ頂梨子割甚内ふ跡にかまくど立帰れ。

志孝潮來武志卷之一終